



カンボジア便り

洪水被害へのご支援ありがとうございました

前回のニュースレターでお願いしました、洪水被害へのご支援として、77名の皆様（スタッフ16名を含む）から377,000円のご寄付をいただきました。当会では教育支援という目標に基づき、洪水による浸水で使えなくなった教科書の支援を第一に考えていましたが、追加の教科書支援に必要な金額を大きく上回るご寄付が集まりました。皆様の温かいご支援に心からお礼申し上げます。

現在は、最も被害の大きかったワットハー小学校も含め、水は完全に引き、通常通り開校しています。皆様からご支援いただいた洪水用のご寄付により、これまでのところワットハー小学校に洪水で使えなくなった教科書（385.17ドル）を補充しております。また、ワットハー小学校以外に洪水の被害を受けた小学校の被害状況の報告と必要な物のリストの作成を依頼しています。報告によれば、校舎が浸水したことによる、黒板や床の補修などが予想されます。

一方で、大洪水はこれまでも概ね3年に1度のペースで起きており、低地に位置するワットハー小学校はその度に大きな被害を受けていることも分かってきました。そのため、今回の洪水被害への支援だけでなく、将来の予防策にもご寄付を活用することとしました。具体的には、ワットハー小学校の要請に応え、洪水時に教科書を避難させるための背の高い棚（高さ1.8メートル、幅4.25メートル×0.9メートル）を支援しました（225ドル）。この他にも、ワットハー小学校には、洪水被害の予防策としてどのようなことができるかを検討してもらっています。洪水被害に関連した支援状況に関しては、引き続きニュースレターで報告していきたいと思



ワットハー小学校の洪水対策の棚

～目次～

カンボジア便り	1
洪水支援ありがとうございました ルセイサン小学校にも教科書補充 なぜ教科書が足りないのか 教科書支援を広げます	
カンボジア訪問記	5
スタッフ紹介	6
ビビンの会・初めてのスタッフ	7
事務連絡	8

ルセイサン小学校にも教科書を補充しました

2010年10月からの新学年度では、8校の新しい学校に対して4,415.94ドル分の教科書と教師用のガイドブックを支援しました。その後、上述のワットハー小学校への385.17ドル分の追加教科書支援に加えて、ルセイサン小学校へも413.42ドル分の教科書の追加支援を行いました。



教科書を手にする子どもたち

なぜ教科書が足りないのか？ リティさんとの懇談

12月4日には当会の現地スタッフであるリティさんが来日し、今後の教科書支援の方向性についてスタッフ一同と懇談を行いました。その中で、そもそも、なぜ教科書が足りないのか？という理由も明らかになりました。

- ① 政府から支給される教科書が初めから少ない——教科書は政府から学校に現物で支給されますが、冊数が圧倒的に足りず、支給時期も10月の年度初めに間に合わず、大幅に遅れる傾向にあります。予算の関係上、教育省が印刷会社に必要数を発注していないと考えられます。
- ② 不正行為——教科書を印刷する印刷会社の所有権は教育省にあります。流通の過程で一部不正行為が行われているらしく、抜き取られた教科書の一部が市場で売られているようです。
- ③ 学校が自由に使える予算が無い——学校には不足した教科書を購入する予算が無い。教師の給料は政府から支払われます。そのほかに各校に現金がわずかに支給されますが、それは教育省が全国一斉に指定する目的（校舎の補修など）にしか使用できず、学校に裁量権はありません。

- ④ 教科書の損耗——教科書の所有権は学校にあります。子どもは学校から教科書を1年間借りて、次年度に返し、つぎの学年の生徒に回します。しかし、ルセイサン小学校のように貧しい家庭の多い地域の小学校では、一家で夜逃げしたりするので子どもがいなくなり、教科書を回収できないことも多いようです。

また、子どもたちの教科書だけでなく、図書館の絵本や教師用のガイドブックなどの不足も深刻な状況であることが分かりました。教師・教育の質という問題では、一般的に、しっかりとしたトレーニングを受けた若い先生は、第一にプノンペン市内の学校での勤務を望むため、いなかの学校には優秀な教師が来ないという構造的な問題が存在していることが見えてきました。また、当会でも参考として使っている、教育省公表の教育関連の統計数値に関しては、NGOからの支援を正当化するために手心が加えられており、信憑性に欠けるなど、今後当会が活動を広げていく上で、現状を正確に把握することがいかに難しく、かつ重要であるかを痛感させられました。

教科書支援を新しい学校に拡げていきます

現状を把握することに続いて、前回のニュースレターでお伝えした、「モデル校」案についても議論を行いました。「モデル校」とは、教科書支援の効果をしっかりと把握し将来の支援拡大の計画にも役立てることを目的に、支援先の小学校の中から「常に全ての子どもが教科書を持っている小学校」をつくり、現地の市の職員にも成果測定などで協力してもらおうという案でした。それにより教育に携わる職員の教科書に対する問題意識を高めることも目的としてあげられます。来日を前に、リティさんには実際に市の職員や各小学校の校長ともこの案について議論してもらっており、効果について前向きな意見もいくつか見られました。一方で、議論を深めるにつれ、プノンペンの教育局が現在でも各小学校の生徒の出席率・退学率などの調査を年3回行っており（数値は非公表）、当会の支援小学校の改善状況についても把握しているはずであることも分かってきました。職員が各学校の状況を把握しているとすれば、当会の教科書支援によりこれまでも色々な改善が見られており、あえて「モデル校」という形にこだわらなくても、今の活動が既に「モデル校」でやろうとしていることに近いのではないか、という意見も出ました。そのような議論の末、最終的には、教科書支援の効果と、「モデル校」プロジェクトでの効果を比較し、当会としての優先順位は、より多くの学校に教科書支援を拡大していくことであるという結論に達しました。今後は、教科書支援拡大を今まで以上に明確に目標とする一方で、「モデル校」の考え方の目的であった「市の職員・政府の人たちを積極的に関与させていく」ということも、必要に応じて前向きに行っていきたいと考えています。洪水支援の進捗と合わせて、引き続き新たな支援状況についてニュースレターでお伝えしていきます。

最後に、ルセイサン幼稚園の支援状況や今後の方針についても議論を行いました。10月からの新年度の通園数は、洪水の影響もあって、10～12名程度と低水準になっています。当会が通園バスを行っていた昨年は30～35名程度であったため、大きく減少しているのがわかります。リティさんは、根本的な問題は、「カンボジアの親に子どもを幼稚園に行かせるという習慣や考え方が根付いておらず、他人に小さい子どもを預けるよりは手元に置いておきたいと考える親が多いこと」だと考えています。当会では、現地に積極的に働きかけ、これまでも親からの信頼が厚いお坊さんに啓蒙活動を行ってもらっていましたが、それでも親の意識を変えることは困難でした。通園バスも通園数を増やす効果はありましたが、親の意識を変えるという意味では根本的な解決策にはなりませんでした。

一方で、昨年新たに支援をはじめた小学校の中の1校が、ルセイサン小学校と同様に幼稚園を併設しており、そちらの幼稚園では、毎年30～40名程度の子どもが通園していることがわかりました。今後、ルセイサン幼稚園の運営に当たって、良い参考例となるかもしれないということで、同校の取り組みについて調査する予定でおります。同時に、親たちへの働きかけを継続し、幼稚園に子どもを行かせる動機づけ（子どもが幼稚園に行きたがるような動機づけ）についても当会として継続的に検討していきます。（市井）



リティさん（前列左）とスタッフたち

皆様、こんにちは。12月中旬にカンボジアに行ってきましたのでそのご報告をさせていただきます。私は日韓アジア基金のスタッフとしてカンボジアの教育支援に関わって、はや2年半になります。今まで支援している学校を一度も見に行ったことがなかったので、カンボジアの教育支援に関わる者として現地のニーズ（必要なこと）と現状を自分の目で確かめるため、長期休暇を利用してカンボジアへ視察に行くことにしました。東京からプノンペンへの直行便はないので、バンコク経由でプノンペンへ入りました。プノンペンが近づき、飛行機の窓から地表を眺めると、洪水の起きた原因が容易に推測できました。湿地帯に川が蛇行しながら流れており、乾季の12月でさえ、川の水位と土地の高さはほぼ同じです。毎年洪水の被害がないのが不思議なぐらいです。

私のカンボジア訪問は今回で2回目でした。前は忘れもしないあの2001年9月11日、シェムリアップのゲストハウスで同時多発テロのニュースを見ました。あの衝撃は今でも忘れられません。

あれから10年。町や人々の様子はすっかり様変わりしていました。いたるところに洒落たカフェが立ち並び、流暢な英語で話しかけてくる人々、私のカンボジアに対するイメージはすっかり変わりました。他の団体の職員にお話を聞いたところ、プノンペンでは高校まで出ていないとまともな職につけず、親たちは子どもたちを大学に入れるために必死になっているといいます。アジアの他の国と変わらない現実がプノンペンにもあるのだと感じました。

また、プノンペンでは驚くほどNGOという言葉が浸透しています。ゲストハウスやタクシーには孤児院のボランティアや訪問ツアーの広告があり、毎年多くの外国人が孤児院を訪れています。私も今回の滞在中、2ヶ所の孤児院と1ヶ所のスラムとアプサラ・アーツ・アソシエーションを訪れました。アプサラ・アーツ・アソシエーションはカンボジアの民族舞踊であるアプサラと伝統音楽の指導を無料で行っているNGOです。



笑顔が明るいカンボジアの子どもたち

今回、日韓アジア基金の支援する学校の視察に2日間を費やすことができました。1日目に学校を訪れた際に、各学校の図書室を見せてもらったのですが、多くの学校には図書室はあるものの、ほこりをかぶった薄い絵本が30冊ぐらいある程度で十分に活用されているとはいえない状況でした。図書室というよりも使用していない昔の教科書の置き場となっているというのが正しい言い方だ

ろうと思います。2日目に訪れた際に読書用の図書を120冊ほど購入して持参し、それぞれの学校に寄贈しました。どの学校でも喜んでいただきましたが、なかでも洪水でほとんどの図書を失ったワットハー小学校では特に喜んでいただきました。

今回たくさんの方にお会いする機会があり、どの先生からも子どもと教育にかける情熱を感じました。また少ない時間の中でも子どもたちとも交流する機会がありました。ある学校の小学5年生のクラスの生徒に「教科書が配られてから、変化はありましたか？」と尋ねてみると、一人の男の子が「教科書があると家で宿題が出来て、授業が分かりやすくなった。」と発言してくれました。予想はしていたものの、実際に自分の耳で聞くと、とても嬉しく感じました。しかし、この子どもたちの何パーセントが小学校を卒業し、その後、中学、高校に進学し卒業できるのかを考えたときに、極めて低い数字であることは想像に難くないと思います。都市部と違って親たちの教育に対する理解は低く、小学校を卒業する生徒も少ないのが現状です。まずは多く子どもたちが小学校を卒業できるようにサポートしていくこと、そのために全ての生徒に教科書を配り、その活動を地道に継続していきたいと今回、決意を新たに致しました。支援者の皆様、今後ともご支援よろしくお願い致します。

スタッフ紹介

会社員 原口彩

皆さまこんにちは。ボランティアを経て、昨年よりスタッフとして当会の活動に携わらせて頂いております。きっかけは、旅先で会った、大雨の中 裸で物乞いをするカンボジアの子どもの姿にショックを受けたこと。そしてカンボジアの人たちのあたたかい笑顔がとても素敵で、悲しい過去のある国だけれど、これからはその笑顔が消えないようにいつも幸せであってほしいと強く思ったこと。どんな小さなことでもいいから自分にできることをしよう！と、帰国後すぐにボランティア先を探しました。加えて韓国が大好きだったので「カンボジア・韓国」という組み合わせに運命めいたものを感じ、カンボジアを支援している団体はいくつもありましたが、迷わず日韓アジア基金を選びました。



活動に参加するようになって、とにかく印象的だったのは学生さんたち若い世代がとても積極的で、かつ世界に目を向けていること。その姿勢から学ぶことは本当に沢山あります。私はというと、まだまだ「国際支援・日韓交流」というより「自身を成長させてもらっている」という状態ですし、そもそも私にできることなんてあるのかな・・・と最近内心悩ましく思っておりますが、一年後には自分なりの関わり方を見つけていることを目標に、まじめなところだけが取り柄なのでこれからもコツコツと活動に携わって行きたいと思います。

ビビンの会・初めてのスタッフ

韓国人留学生 ユジョンへ

日本に来たばかりで、日本語が下手だった私は日本語の練習も兼ねて友達を作ろうと思い、あちこちの日韓交流会に参加していました。ビビンの会を知ったきっかけは「トンユモ（東京留学生の集まり）」でした。

初参加の日、ビビンの会は他の交流会とは違うと思いました。カンボジアの子どもたちに教育支援をしているところはもちろん、しっかりしたプログラムや懇親会に参加して“こんなに立派な交流会もあるんだ”と思いました。スタッフもとても親切で、先方から声をかけてくれたので、緊張もせずすごく気が楽でした。楽しかったので2回目も参加し、3回目も参加しようと思っていたらボランティアスタッフの募集メールをもらいました。前からやってみたくて思っていたのですぐ返事をしました。でも、やっぱり下手な日本語が一番心配でした。それでも頑張ろうと思い、朝早くアジア文化会館に行きました。今回のビビンの会はクリスマスバージョンだったので、いろいろ飾り付けもしました。その後、プログラムの流れやスタッフの役目など打ち合わせをしました。

参加者の立場では多くのスタッフがこんなに朝早くから苦勞しているとは思いませんでした。でも、自分でスタッフをやってみて、やっと「私たちのために頑張ってくれてたんだ」と思いました。私は席までの案内や、未熟ではありますが、日本語ができない韓国人に通訳をしたりしました。そして私が初めて参加したときに日本語が聞き取れなくて慌てたのを思い出しました。その時は韓国人スタッフがあまりいませんでした。その代わり韓国語が上手な方がいらっしやって通訳をしてくださいました。

たくさんの方が席を埋めてくださり、すぐ他己紹介を始めました。私はサブリーダーでリーダーをサポートする役目でした。他己紹介は韓国人と日本人をペアにしましたが、みんなが照れていながらも身振り手振りまでして楽しんでくださいました。そして一言でも日本語や韓国語を使うことが大事だと思い、他己紹介が終わってそのまま皆さんと話を続けました。

みんなが盛り上がったところでプレゼント交換を行いました。うちのグループの男性の方が羽のついたピンク色のマフラーをもらい大爆笑しました。

ビビンの会が終わり、懇親会が続きました。私はこの懇親会の雰囲気すごくいいと思います。まず立ち飲み形式なので、たくさんの方々とお話ができるのと、生活が大変な留学生にとって他の交流会と比べてありがたい値段だからです。私はいろんな交流会に参加してみましたが、他の交流会はただの飲み会にすぎず、ちゃんとした進行役も趣旨も何もない感じです。でも、ビビンの会は内容も人もよいのでこの会にスタッフとして参加できたのをうれしく思います。周りの人にも教えてビビンの会がもっと大きくなり、もっと多くの方が参加できたらと思います。またスタッフとしてお手伝いしたいと思います。

(原文韓国語 訳・イ ガンビン)

第16回 ビビンの会のお知らせ

場所 東京千石 アジア文化会館

総会 4月23日(土) 14時～17時

参加をご希望の方は、このページ下部の「お問い合わせ先」にご連絡下さい。

当会イベントにボランティアスタッフとして参加下さった方(敬称略・五十音順)

11月6日 ニュースレター35号 発送作業

上出洋生 北村宏大 水津真織 鈴木皓太 高江洲将行 星野愛 松永 薫

12月18日 第15回ビビンの会 グループリーダー

秋山卓澄 上出洋生 久保田裕美 小森新 パンヒョナ ユジョンへ

12月25日 年賀状宛名書き

新井利延 伊藤栄一郎 笠原祐子 上出洋生 北村宏大 小森新 菅知佳 高江洲将行

2010年10月26日～2011年1月12日に会費・ご寄付を下さった方 敬称略・五十音順(別枠除く)

浅野麻里	阿南糸代	荒川雄彦	井内和夫	市井秀治	井上卓也	岩見豊子
内田雄之	江本哲也	遠藤保弘	王嶺	大澤龍	大塚紀子	大坪玲子
大西直美	大町卓也	小川昭子	小川英	奥村宗之	小原勝子	小原正敏
語ろう会	金子十三松	唐澤一登	川崎由紀子	川辺寛子	神戸博子	菊池礼乃
北川節子	北野礼子	木村由美	黒巢香	小林栄次郎	佐藤和之	篠原功
柴田義之	下東令子	菅原順次	鈴木香子	高木修	高藤里紗	高橋周孝
高橋政行	高柳直正	田中慶子	田中節子	田村洋平	丹下誠司	チラタ会
塚本美和子	佃吉一	中田邦雄	波多野淑子	原口彩	平島清行	福本正勝
藤井幸子	藤井陽子	古川かおる	堀内和子	堀場秀亨	松井ふみ子	松田明美
松本博一	松本昌幸	村松悦子	本宮慎吾	森健造	谷池教子	矢崎芽生
柳田文子	山口忠正	山越栄子	山崎杜子	湯田亜里沙	吉崎玲子	吉野早苗
吉村悦子	若宮康夫	渡邊多加志	渡辺京子	渡部友理恵	渡辺良美	

桑山七郎・静子 日本聖公会川越キリスト教会 福島忠男・シゲ 細川武・敦子 ボランティア野菊の会

ご入会・ご寄付のお願い

活動会員:年会費 5,000円(学生、未成年者 2,000円)
賛助会員:年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)
法人会員:年会費1口10万円
ご寄付:2,000円以上おいくらでも

<郵便振替口座>

口座番号 00180-2-25153

口座名 日韓アジア基金

・活動会員:活動に積極的にご参加頂ける方。総会での議決権がございます。

・賛助会員:定期的にご支援頂ける方。

ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けします。

<お問い合わせ先> (日本語でお願いします)

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内

Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)

E-メール: jkaf@ml.infoseek.co.jp

HP: 検索サイトで「日韓アジア基金」で検索なさってください。

発行人 特定非営利活動法人 日韓アジア基金・日本 代表理事 江本 哲也